

開放制教員養成初年次教育の目的

武田 信子

1. はじめに

日本における教員養成はほとんどが学部4年間で中に行われる。国立の教員養成系大学では、主に小学校の教員免許取得が卒業要件となっており、初年次から教員をめざしたカリキュラムがスタートする。現場に1年次から入る場合も少なくない¹。一方で、一般大学や私立大学の開放制に基づく教職課程では、必ずしも最初から教員をめざす学生ばかりではなく、多くの学生が免許取得を目的として教職科目を履修し、本格的な学修は2年次頃から始まることが多い。本学でも、これまで1年次にはいわゆる「教職の意義等に関する科目」、すなわち「教職の意義及び教員の役割」「教員の職務内容(研修、サービス及び身分保障等を含む)」「進路選択に資する各種の機会の提供等」の科目のみ「教職入門セミナー」(2011年度より「教職入門」と名称変更)として置き、1年次は、学問の基礎的事項を学ぶ各学科の専門科目や、いわゆる「66条の6科目(日本国憲法、情報、語学、スポーツ)」のような教員としての基礎づくりにあたる科目を履修するよう勧め、余裕があればできるだけ各科目の免許取得に必修の「概論」にあたる科目の単位取得につとめるようアドバイスしてきた。クラブ活動や社会的活動にも参加し、見聞を広げ、社会性を身につけることも大切であるということも伝えてきた。

一方、教員免許をどのような学生に与えるべきか、という問い、どこまで何を学んでいけば、免許を得るにふさわしいと考えられるのか、という問いに対して、平成18年7月、中教審は、4年次後期に開講する「教職実践演習」で、4つの教員として求められる事項(①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項 ④教科・保育内容等の指導力に関する事項)を確認するようという答申を出した。

それに対して本学では、試行的ではあるが22年度入学学生からコンピテンシーリストの活用を始め、教員になろうとしている自分の今後の課題への気づきを促している。

このような流れの中で改めて問われるのは、2年次10月に教職課程履修を決定する前に、学生はどのような力をつけている必要があるのかということである。言い換えれば、履修を検討している学生たちに、教職課程としてはどのような授業を提供する必要があるのだろうか？

本学で履修決定前に提供されている必修の「教職に関する科目」は「教職入門セミナー」「教育原論1」「各教科の教育方法論1」(2011年度入学学生から新カリキュラムになるため、若干の変更が生じる)であるが、特に初年次に最初に学生が接する「教職に関する科目」である「教職入門セミナー」をここ数年担当してきた教員として、本稿でその内容を初年次教育の目的と照らして整理し、検討しておきたい。授業内容は毎年改変しており、本稿で紹介する授業は2010年度実施のものである。最後に資料として2010年度「教職入門セミナー」の短縮版シラバスを付した。

ちなみに、本稿は授業報告であり、他大学の授業等との比較検討や学生の学びの内容の検証、他の授業との総合的カリキュラムマネジメントの視点による検討など実証的研究は行っていない。それらは今後の課題である。

2. 教職課程履修を決める前に必要なこと

筆者が本学の学生たちに初年次の授業を通して伝えたいこと・求めることと、それに対応して展開している授業の内容は、以下の通りである。

(1) 自ら学ぶ気持ちと態勢(OECDのキー・コンピテンシー²で言えば「自律的に行動する力」)を持っていること

赤子は誰が強制しなくても、自分が生きていく